法然共生フォーラムｉｎ福岡

～いのちを慈しむ知恵～ 命と命響かせ"ともいき"を

モノや自然などに宿るさまざまな命との共生を考える「第3回法然共生（ともいき）フォーラムｉｎ福岡～いのちを慈しむ知恵（浄土宗、西日本新聞社共催）が7月22日、福岡市中央区の同市少年科学文化会館で開かれた。フォーラムは浄土宗（総本山・知恩院、京都市東山区）の宗祖法然上人800年大遠忌（2011年）の記念行事として開かれ、市民約600人が参加。「モノとの共生」をテーマに、さまざまなモノに命を見いだしてきた日本人の独特な感性に着目しながら、モノと共に生きる私たちのこれまでとこれからを語り合った。

各パネリストが「ともいき」への思いを語ったパネルディスカッション

第2部 ともいき談義

共生の在り方人間に問題 榮久庵氏
人間の業制限して共生を 黛氏

■日本人独特の感性

高田 日本のある自動車工場では、産業ロボットと従業員が一緒にラジオ体操をしたり、ロボットに愛称を付けたりしていると聞きます。日本にはモノに対して独特の感性があるようですね。

榮久庵 若いころ、裸の女性がバイクにまたがっているイメージで、曲線の美しさを強調したバイクをデザインしました。バイクを擬人化し、モノに命の温かさと親しみを持たせたかったのです。キッコーマンのしょうゆ差しのデザインでは、液体の滴を表現。おなじみのデザインとして生活に工業デザインが息づいていることが誇りです。

モノの世界にも命があると感じたのは2歳前でした。実家が寺だったので、けさを着てお経参りに行った厳しい冬の日、帰りのバスを待っていたら茶屋のおばあさんが手を差し出してくれました。「ありがとう」と手を差し出すと同時に、持っていたガラスの盛り器が手から滑り落ちました。コンクリートの地面だったのに、これが不思議で残れなかった。おばあさんの青年僧を思う気持ちと私の率直な感謝の気持ちが共鳴して、その心がガラスに宿って残れなかったと納得しています。

黛 俳句は逆に、モノに思いを託します。芭蕉は「古池や蛙飛び込む水の音」といった。この句の季語は蛙ですが、季語にはたった17文字の中で、情感と情景などの余白を語る力があります。

春の季語であるほろろ鳥という単語からは、切なさないろんな情感がわき上がってきますね。

また俳句に季節を詠み込むことで他者へのおいさつとしたり、目の前の情景や感情に水滴の命を宿すこともできます。私は、奈良時代の歌人、山部赤人の詠んだ「春の野にすみれ摘みにと来し我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける」という歌に出合い、そのとき感…それが「日常のあと旅光の…すみれかな」俳句を通して、目の前のことだけでなく、時空を超えて赤人や赤人が摘んだすみれとつながって共生できるんですね。

行正 仏教における モノの とらえ方は、物心一如（一色即是空）という言葉があるように、モノも生命体も一つの世界に属します。ではモノにも命があるのかどうか。

昔話ですが、大酒飲みの父の死をからかわれた幼い息子が、棺おけにぶつけられた石が、「今は我慢のしどころだ」と言ったエピソードがあります。人とモノは長い間かかわり合って生きているのに、モノを使うだけで共生することはできていない。それは人間の方に問題があるんじゃないかと思っています。

高田 環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニア人女性、ワンガリ・マータイさんは、日本語特有の「MOTTAINAI（もったいない）」という言葉を世界に広めてくれていますね。

山折 省資源化・再利用・再資源化の3Rだけではなく、マータイさんはさらに「リスペクト（尊ぶ）」を加え「ありがたい」「尊い」「申し訳ない」という気持ちを織り込んでくれました。理解を深めてくれたなとうれしく思います。

黛 医療技術の発達によって、人間はモノだけでなく命さえも自由に手に入れようとしています。本来命は授かるものなのに、最近は人のエゴや欲望がなくなってきている気がします。生死は神仏の領域であると、線引きしていく必要もあると思うんです。

行正 教海師として刑務所に行ったとき、病気で体にまひが出た受刑者が初めて命の尊さに気付き「体も右と左がつながって景の形をしているんですね」と言いました。果物も同じ形で、中に種を宿している。人の体も一緒だと思います。

高田 かつてがハラ砂漠に立ったとき、生命を感じることができませんでした。ここで生きるには唯一、絶対の超越的存在に帰依するしかない。しかし、釈迦が悟りを開いた森や、私たちが住む日本は多様な生命があふれています。あらゆるモノに命を見いだす土壌があるのでしょう。

行正 私たちはモノも自分も人の命もとれだけ大切にしているでしょう。互いの命を大切にすることこそ共生の原点ではないでしょうか。

黛 日本人は四季を呼吸するかのように自然に愛でています。私は俳句を通して命を詠み継いでいきたい。そして私の俳句から誰かが新たな俳句を詠んでくれれば、私は未来の人とも共生できることになるんですよね。

榮久庵 俳句の17文字のように、日本人は制限やルールを設けて、その中で知恵や工夫を施して命を輝かせてきました。海に開まれ、状況の悪い中で、創造的制限をつくって共生してきたのが日本民族なんだと思います。

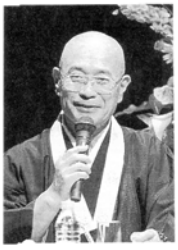
山折 今の日本はモノにあふれ、共生できていません。これからは「もったいない」と「腹八分」をキーワードに共生を実現していってはどうでしょうか。そしてMOTTAINAIと同様に「TOMOKI（共生）」という言葉も世界に発信していってはどうでしょうか。

コーディネーター 佛教大学教授 **高田 公理氏**

たかだ・まさとし
1944年、京都市生まれ。京都大学哲学部卒業後、武庫川女子大教授などを経て、2008年から現職。学術博士。
専門は社会学や文明学、観光学。

コメンテーター 国際日本文化研究センター名誉教授 **山折 哲雄氏**

やまおり・てつお
1931年、米国生まれ。岩手県出身。東北大学文学部インド哲学科卒。宗教学者。春秋社編集部を経て、京都造形芸術大学大学院長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。


浄土宗僧侶 **行正 明弘氏**

ゆきまさ・めいこう
1942年、福岡県生まれ。佛教大学卒。浄土宗福岡教区正覚寺住職。大本山善導寺布教師会参与。布教資料として「浄土宗案内板」「日課カレンダー」などを作成。

俳人・歌人 **黛 まどか氏**

まゆずみ・まどか
1962年、神奈川県生まれ。94年「B面の夏」50句で第40回角川俳句賞奨励賞、2002年「京都の恋」で第2回山本健吉文学賞受賞。著書に句集「忘れ貝」「あなたへの一句」など。

工業デザイナー **榮久庵 憲司氏**

えくあん・けんじ
1929年、東京都生まれ。東京芸術大学美術学部卒。日本の工業デザイン界の草分けにして第一人者。「キッコーマン醤油卓上瓶」をはじめ、鉄道車両やカメラなどを手掛ける。

■現代に欠けるもの

原点は互いの命を大切に 行正氏
モノへの敬意と腹八分で 山折氏

第1部 ともいきがたり（講演）「モノに宿るいのち」

国際日本文化研究センター名誉教授 **山折 哲雄氏**

モノにあふれ交流を断つ現代

フォーラム開催の7月22日は、日本の陸上で46年ぶりの皆既日食が見られた日。古代インドでは日食は悪魔の仕業とうらられるなど、月や太陽と人間との間では多くのドラマが生まれてきた。

日本では千年以上前からの夕日信仰が特徴的だ。日本人が落日に感動の念を抱くのは、そのかなたに浄土を思い描くからではないか。太陽と共生しようとする考え方だ。今回の皆既日食は私に、宇宙の物体の世界と、それを見る人の心の世界が行き交うさまざまなはどんな状況か。教えその歴史を思い起こさせ、さらに現代日本でのモノとの共生の在り方を考えさせた。

時的に体験した。訪れた先は見事なゴム原敷。ほとん人間を頼りなく機械に近づけようとする近代文明に対して、ロボットを頼りなく

それとは真逆な生き方をしたのが、明治期の俳人・歌人の正岡子規だ。結核で亡くなったのは35歳だが、人生の最期まで命のエネルギーをほとばしらせた。寝たきりの自分の世界を花、机の上に置かれた「形分に美い掛かけている。話人間の存在認識は、浄瑠璃や和歌の世界などで豊かと受け継がれた。

しかし残念なことに現代の日本社会では薄れつつある感覚かもしれない。人とモノが互いに同かを感じ合う共生という生き方、7月の皆既日食は、日本人の生き方についても考え直させてくれる重要な出来事だったのではないかと思う。

手塚治虫氏作のアニメ「鉄腕アトム」に象徴されるように、私たち日本人にはモノに命が宿るという心性を育てきた。

さて、今の私たちの生活は、そう思うとそっとした。

「病牀六尺」と呼び、激しい痛に耐え、絶叫し、妹に悪態をつきながらも、六尺（約1・8メートル）四方の部屋の風景を書きつづった。天井の「笑面山色」という章で、渓谷を流れる水の音や山々の花瓶に挿された野の始める感じ、自分の心の変化を書き留めた。ちょうどその時、病気で体にまひが出た受刑者が初めて命の尊さに気付き「体も右と左がつながって景の形をしているんですね」と言いました。

鎌倉時代に『曹洞宗』を開いた道元も著書「正法眼蔵」の「渓声山色」という章で、渓谷を流れる水の音や山々の自然の方から語り掛けてくるのだと、こうした自然と人間の存在認識は、浄瑠璃や和歌の世界などで豊かと受け継がれた。

しかし残念なことに現代の日本社会では薄れつつある感覚かもしれない。人とモノが互いに同かを感じ合う共生という生き方、7月の皆既日食は、日本人の生き方についても考え直させてくれる重要な出来事だったのではないかと思う。

〈主催〉浄土宗
〈共催〉西日本新聞社
〈後援〉京都新聞社
〈特別協力〉法然上人をたたえる会
〈協力〉総本山知恩院、大本山増上寺、大本山金戒光明寺、大本山知恩寺、大本山清浄華院、大本山善導寺、大本山光明寺、大本山善光寺大本願

浄土宗21世紀勞頭宣言

愚者の自覚を
家庭にみ仏の光を
社会に慈しみを
世界に共生を

総本山 知恩院（京 都）
大本山 増上寺（東 京）
大本山 金戒光明寺（京 都）
大本山 知恩寺（京 都）
大本山 清浄華院（京 都）
大本山 善導寺（久留米）
大本山 光明寺（鎌 倉）
大本山 善光寺大本願（長 野）

平成23年に、宗祖法然上人の800年大遠忌を迎えます
法然上人の心とともに、新しい「共生文化」を創造しましょう

法然共生

宗祖法然上人800年大遠忌

浄土宗 Jodo Shu
Buddhist Denomination
http://www.jodo.or.jp

大遠忌記念事業トピックス

第3回 共生・地域文化大賞
「アイデア・企画部門」募集中
"共生の地域づくり"へ
あなたのアイデア、お寺にください!

さまざまな人々が
思いや願いを持ち寄り、わかちあう
お寺は本来"地域の共生堂"なのです
「お寺の境内でこんな事ができないかな?」
「お寺と一緒にこんな事をやってみたい!」
"共生の地域づくり"へ
ワクワクするような
アイデアや企画を募集中です

応募方法
◆応募申込書に400字以内で記入し下記へ郵送
※応募申込書はホームページと事務局で配布中
◆応募締切は9月11日(金)必着
◆詳細はホームページ参照 http://tomoiki.jp
※「一般の部」のほか「中学生以下の部」もあります

【応募・お問合せ先】
〒600-8104 京都市下京区五条通高倉西入 いづつビル6階
(特活)きょうとNPOセンター内
共生・地域文化大賞運営事務局
TEL:075-353-6292 FAX:075-353-7689
Mail:info@tomoiki.jp